

水の女（前編）

倉間 利津

ちくり、と目の奥を刺された。反射的に俯き、目蓋を押さえる。眼球の裏側で痛みが瞬いていた。籠の中に入られてなお、かまびすしい小鳥のように、光が脳髓を攪拌する。そうした刺激が収まるのを待つてから目を開いた。人差し指と薬指の間から周囲をうかがう。

郵便局の角を曲がった辺りから人影はまばらだ。横断歩道を挟んで向こう側は、白いシャツに黒いスラックスの群れ。自分と同じS高の生徒ばかりだ。学校は既に夏休みに入っているため、その数は普段より少ない。現在は三年生と中間テストで赤点を採ってしまった者だけが補講に通っている。僕は後者だった。男子生徒ばかりの人波は憂鬱そうで、ピンと張った襟だけが夏の光線に映えていた。徐々に立ち上り始めた朝の熱気が、湿気を伴って袖の内に入り込む。首筋に汗が滲む。だが今は拭かない。白い指の隙間から見慣れた景色を覗く。

鼠色のアスファルト、白線、黄緑色したツツジの葉、知らない雑草のグリーン、信号の赤、空は夏らしい水色、ライトグレーの電柱、法律事務所の茶色い煉瓦造り……。見つけた。

思わず口元が綻ぶ。指の覆いをゆっくりと外して、真つ向から横断歩道の向こう側にいるそいつを見た。

太陽の反逆者。

そう呼んでいるものがある。そいつは主に夏現れる。駅前前の雑踏やマンションのベランダ、プールサイドや野球場、今いる何てことない歩道にもそいつは現れた。太陽の光を全身で弾き返す反逆者。僕は時々、流れ弾に当たる。そうして目を押さえ、微笑むのだ。彼らを探すことが僕には愉快だった。

今日見つけた奴は全身を、尖った四つの縁まで銀の鎧で包んでいた。その銀色が太陽の光を反射し、僕の目を射たのだ。

それは高さのない直方体。右上の方が少し窪んでいて、中が空洞になっていることが容易に知れた。その窪んだ部分に大きな輝きを溜め込んでいる。

僕はまた微笑んでしまった。そう、そいつはなんてことない、法律事務所の看板だった。それが太陽の光を反射したというだけで反逆者になる。口も利けない鉄板が、人間様の目を射抜く。

信号が青になった。この信号は赤の時間が異様に長い、青の時間は他と変わらない。大抵の生徒は、ここより先にある信号で向こう側に渡る。僕も普段はそうするのだが、今日は思わぬ流れ弾だった。ひゅっと、音にならない口笛を吹きながら一歩踏み出す。

ざらり。

また、流れ弾だ。目に覆いを掛けてじっくり探す間もない。そいつは機能を取り戻せないでいる僕の目に、真っ直ぐ飛び込んできた。

黒と白とが反転したようにぐらりと揺らぐ視界。その中央で反逆の光がたなびく。未確認な生命体のように僕を驚嘆させた。

それは、ペットボトル。

プラスチックキャップのすぐ下まで、たつぷりと透明な液体を含んでいた。その輝きが周りの色を取り込んで、緑に青に茶に、僅かに歪みながらも生き生きと輝いている。水だと直感的に思った。躊躇わずに景色を受け入れるそれは、体にいいと言われる成分など一つも含まれない気がした。

勿論、ペットボトルが一人で横断歩道を渡れる訳はない。それは人間にしっかりと抱かれていた。正常に戻った目はその彼女を映した。

彼女、だった。それしか言えない。長髪の、妙齢の女。

白いワンピースに体の曲線が目立っていた。目も眉も髪も黒く、肌は白くもなければ小麦色でもない。黄色人種らしい色だった。化粧をしていないのかと思った。就いている職業や地位を想像することが出来ない。だから彼女と呼ぶしかなかった。

むき出しの肩が骨ばっていて、目の下に大きな隈があ

る。そんなところが職に就いていなさそうだ。かと言って誰かの妻でも娘でもないような。ラベルのないペットボトルを持つていなくとも奇妙だったに違いない。

横断歩道の真ん中で僕と彼女は擦れ違った。こちらが多大な驚きを以って見つめているのにも関わらず、彼女はちつとも気づかなかった。一時、肩と肩とが触れそうな程に、僕と彼女の距離が縮まった。彼女の顔が目の前に広がっていくようだった。

彼女は笑っていた。

ペットボトルの水を見つめて、それはそれは幸せそうに笑っていた。限で縁取られた目を細めて。

横断歩道を渡りきった時、僕は思わず振り返っていた。まるで磁力にかかったように。ひっくり返されて、カチヤツと音をたてた。遠ざかる背中を穴が空くまで見つめたかった。しかし一分も経たない内に彼女は角を曲がってしまった。だから僕が長い間見つめていたのは、彼女が消えた後の道だ。消えた彼女の影だ。

一時間目の予鈴が聞こえてくるまで、僕はそこに立ち竦んでいた。

僕が受けているのは英語の補講だけだ。いつも一限だけのために学校に来る。定期を使っているので交通費はかからないが、学校にいる時間が短いので損したような

気分になっていた。金銭的なことではない。ここまで来る目的が道のりに値するかということである。苦痛な五十五分間のために往復二時間弱は徒労だ。それを紛らわせたくて図書室に通っている。読むのは主に図鑑だ。緑色に発光するキノコの写真やドイツ人の名前が延々と羅列された本などを、光の当たらない図書室の隅で眺めた。本の重さを肘に感じながら立ち読みするのが、僕は好きだ。十本の指に均等に伝わる感触が、好きだった。

けれど今は、閉館、と彫られた木の板が目の前戸の下がっている。美術部員か何かの作品だろう。凝った装飾だ。文字の上に彫られたフクロウの目が僕を睨んでいた。

それに背を向けて歩き出す。家に帰る気もしなければ、どこか寄り道したいという気分でもない。そんなことを考えながらA棟との連絡通路の前を通り過ぎ、階段を上った。人気がない空間に上履きのぺたぺたという音が響く。主に補講は国英数の三科目。特別教室ばかり集めたB棟で授業は行われていなかった。

S高はA棟、B棟、C棟の三つの棟で構成されている。L字型で五階建て、普通教室と職員室、校長室などがあるA棟、四つの理科室に図書館、芸術科目に使う部屋など、特別教室がある三階建てのB棟、体育館とたくさんある部室があるC棟が、中庭を囲むような形で建てられている。

A棟とC棟は耐震強度の問題から三年前に改築され、近代的な外見と開放的な造りを得た。が、B棟はそうではない。長方形でただ部屋を四角く区切っただけの造りは、長屋を連想させる。正面玄関からはA棟とC棟しか見えないため、高校見学で内部まで入ってきた時には、がっかりしたものだ。茶とベージュを基調とした清潔な棟の裏に、B棟は灰色に雨垂れ模様でひっそりと建っている。A棟の五階から見下ろせる屋上は、魚が死んだ後の水槽のように、虚しさばかりを漂わせていた。

そのB棟を一人で歩くと、虚しさが余計際立ってくる。階段を上って、いつの間にか三階の廊下まで来ていた。全開にされた窓から、すぐ横にある桜の木がさわさわと鳴る音が聞こえる。ワックスがけされた床が黒ずんでいるのはそのままに、しつとりと輝いていた。涼しげだな、とぼんやり考えながら、書道室、技術室、美術室の脇を通り過ぎていく。音楽室の前で足を止めた。ここは突き当たりの部屋、行き止まりだ。何となく扉に手を伸ばしてみた。すると棒を差し込む形の古ぼけた錠のついた引き戸は、あっさり開いた。途端、目の前に鮮やかな色が広がる。

原色から離れた、暗い色彩の格調高い赤。
煮込んだ苺のような、潰した葡萄のような、酸素を含み始めた、血のような……。
音楽室の床は赤いシート敷きだった。床は奥の方にい

くにつれて高い三段になっている。久し振りにこの色を見た。最後に来たのはいつだったろうか。そんなことを考えながら入り口にある下駄箱に上履きを仕舞い、中に入った。赤いシートは擦り切れて軟らかいような感触は殆どなく、ただその色だけがこの古い建物の匂いに調和し、威厳を保っていた。

白いカーテンが閉めきられた室内は蒸し暑く、木管や金管楽器のどこか黴臭いような匂いが微かにした。音のない空間は午睡を楽しんでいるかのようで、僕は靴下履きの足をひそめた。部屋の奥には椅子が積み上げられ、窓の反対側の壁に木琴と鉄琴が並べられている。正面に左半分が五線譜の黒板があり、その目の前に教卓、指揮台があった。そして指揮台の横に、ピアノがある。

カーテンから漏れる明かりに、黒光りするグランドピアノ。

足についた金色のキャスターが斑に錆びている。蓋は閉じていた。傍にあるピアノ椅子は革張りだ。これも黒く艶のある色で、四角く、鉾が六つ打ってある。シンブルで華奢なところのない椅子だと思った。背もたれはついていない。そこがいいと思う。そもそもピアノを弾く時、何かに身を預ける瞬間などないのだから。

僕はピアノに近づいていった。鍵盤を覆う蓋のくつきりとした曲線に触れる。つるつるした感触が布地を通して神経まで流れくるようだった。右肩が疼く。息を呑ん

だ。

ガラリ、と部屋の戸が開いた。僕は反射的にそちらを向く。白いワイシャツの上半が戸からひよいと覗いていた。髪の色と同じ黒い相貌と目が合った。

一瞬ぼかんとしてしまった。ピアノに触れていた右手が、気がつくときポケットの中にある。咎められるようなことなど勿論していない。こちらの動揺を知ってか知らずか、彼が発したのは問い詰めるような声だった。

「思い出しているのか、早川」

菅澤は理系の生徒だ。僕は文系なので普段殆ど彼に会わない。クラスが一緒だったのは一年の時だけだ。

「ところで菅澤も一限だけ補講か？」

「いや、実験に。来たんだが、部屋の鍵が、開いていなかった。教員も、いなかった」

タンスの引出しを一つ一つ開けるように菅澤は言葉を並べる。明瞭で聞き取り易い低音は不快ではなかった。

が、間の取り方やイントネーションがいちいちつかかってくる。夕暮れの影ぼうしを引きずっているような、区切りの多い喋り方だった。しばらく聞いているとそれが余計なもののように思えて、焦れてしまう。

「へえ、奇遇だな。僕も行く予定だった図書室が閉まっていた、ふらふらしてたところだったんだ」

僕は菅澤に笑い掛けた。が、彼は無表情に前を向いたままだ。相づちすら打たなかった。音楽室から出て並んで廊下を歩き、もうA棟の玄関まで来ていたが、僕達が交わした会話はこれだけだ。再びお互い無言になり、それぞれ靴がある棚に向かう。僕は一番上の段の蓋を開けてスニーカーを取り出した。靴箱はマグネットの止め具がついた木製、下靴を履くところからは花崗岩で出来ている。蓋を閉じた時もスニーカーを落とした時も、いい音がした。シンとした廊下にパタツパカツ、と。それとまったく同じ音が棚の向こう側からも響く。その音に肩を竦めた。まったくよりによってどうしてあいつに、あんなところ見られたりしたんだろう。

僕は手を使わずに靴を履こうとした。焦れったくて細かいことをやる気がしない。手でやれば一回で済むのに、何度もつま先を花崗岩に打ちつける。少し潰れた踵や、靴紐の下に収まっている布地が思うようにならなかった。つま先が触れるたび、滑らかな石の表面がきゅつきゅつと、笑うような音をたてる。

「早川、」
「ああ、ちよつと待ってくれ。今行く」

ガラスの扉に凭れて菅澤がこちらを見ていた。これから一緒に帰る僕を待っているのだ。今日は音楽室でのこともあって、その姿がやけに忌々しい。組まれた腕、少し曲げたストラックスの膝。そんなものがガラスに映って

二つずつ、取り澄ましたような顔をして僕を見ている。打ちつけるつま先が痛くなつた。右足の踵がどうしても思うようにならない。しかしここまでできたら、手を使う訳にはいかないのだ。

「ごめんな、行こう」

足首がもやもやするが諦めることにした。菅澤が頷いて僕の横に並ぶ。正直、明るいとは言えない奴だ。一年の時のことを思い出しても、こいつが誰かと話している図は見えてこない。だから一年程前、突然一緒に帰ろうと言われた時にはびっくりした。

僕は別にクラスで仲間外れにされているような哀れな奴ではない。かと言って、そんな奴らの話し相手になるような優しい人間でもない。菅澤も同じだ。彼は一人だけが仲間外れではなかった。成績が良くて、それなりに人にも合わせられる。一年間同じクラスにいて、僕は菅澤をそういう奴だと判断した。体育の授業では、いつも違う奴と組み体操をしていた。移動時には一人でも、特別教室に着く頃には誰かの傍にいた。それなのに声を交わして笑っているとか、そんな姿は記憶にない。

「今、やっているのは」

校門を出て十メートル程歩いたところで、菅澤が口を開いた。日影だが屋内よりだいぶ暑い。ジージーと蝉の鳴く声が聞こえていた。この辺りは街の喧騒から離れていて、ビルなど商業の建物よりも住宅の方が多かった。

そのため、夏には庭木に集まる虫の音が車の音よりも響く。そんな中で菅澤の声を聞くと、余計忌々しかった。

「確認、なんだ」

「確認ってなんだ？」

ワイシャツの襟がうっとうしく感じられる。胸倉をばたばたやって風を入れながら、菅澤の話聞いた。

「やったことのない、実験をしている。結果だけ知っていて、やったことのない」

「へえ、おもしろそうだな」

適当に相づちを打つ。具体的な内容も知らないで身勝手な受け答えだ。でも相手が相手だからしょうがない。こいつだつて身勝手なのだ。菅澤の目は僕ではないものを見ていた。今は正面から向かい合っていないのでそのまま思わないが、こいつといると僕は、自分がシャーレーに入れられているような感じがする。それはとてもじゃないが、よい感覚とは言えなかった。丸く頑丈なガラスの檻に閉じ込められ、四六時中上から覗かれるなど。

「ああ、そうだ。とても、おもしろいんだ」

菅澤が口をひくつかせながら言った。僕はほっとする。彼が見ているのが僕のいないシャーレーだからだ。少なくとも今彼が興奮しているのは、僕ではないものの上におかれた課題らしい。しかしこんな安堵、気づかれたくないものだ。横目で彼を見やると、機嫌な顔をしていた。「雑誌、新聞、噂話、ちらりと目に入ったとある風景…」

：確認したいものがたくさんあって、困ってしまう。それをすこしずつ解消しようと思った。今は小学生の頃、気になっていた実験をしている。覚えはないかい？ 教科書には書いてあるんだが、やらして貰えなかった実験」
「…：さあ」

饒舌になっっている。こうやって帰るようになる前は、まったく知らなかった顔だ。科学のこととなると、彼は目を輝かせる。黒い瞳が夜中の水溜りのように妖しく波立っていた。彼は早口に喋っている。言葉についた影だけはそのまま、僕を不快にさせた。

「アンモニアの噴水、ミョウバンの再結晶、卵の殻を試験管に入れて…：二酸化マンガンでしかやったことがなかったから、今日はそれをやるつもりだったんだ。本当に、酸素が出るのか、確かめたくて…：」

熱のこもった口調で菅澤が喋っている。そんな時、僕の目はあるものを捉えた。

水。
形がないはずなのに、力強い。透明さと、ぼこぼこした歪み。反逆心に煌く姿が今朝の情景と重なって眩暈がした。あの細い腕の中にいた水。嫌らしい幸福を紅の代わりにして、艶めく唇。

今ここにあるのも、水。緑色のホースにつけられた銀色のシャワーヘッドから、クレヨンのようにカラフルな花の上に、落ちて、曲線を描いて――。

すぐ隣で流れていた不快な影ぼうしの声。それが不意に止んで、鳴ったのは、

「ごめんなさい！」

という高音だった。続いて、ガン、と耳を痛くする音、足音。それらが鳴る前からすでに、目と肌が状況を知っていた。ホースを手放して蛇口に駆け寄る女性。シャワーヘッドが煉瓦にぶつかると、ゴムサンダルが踏み石を跳ねる。カラカラと慌しい音を響かせ、女性が網戸を開けて家の中に入っていくのを見た。そんな一連の動きに並行して、濡れたシャツの水分が染み込んでくる。肌に張り付く冷たい感触が、快いと脳に訴えていた。

「早川、お前……」

先程とは打って変わって、脱力したような菅澤の声が背後から聞こえた。水滴が髪から汗のように滴ってくる。分からない。菅澤が呻くように呟いた。分からない、分からない……。

その時、ホースを持っていた女性が戻って来た。

「ごめんなさいねえ。まあ、こんなに濡れて。気づかなかったわ。これ、タオルです。使って頂戴。ああ、それにしては制服が台無しだわ、私なんてこと……」

ピンク色の清潔そうなタオルを手渡して、先程ホースから溢れていた水と同様、勢いよく女性は喋り始めた。チェック柄のエプロンに、泥で汚れた腕カバーをつけている。僕の母と同年代頃、四十は過ぎていそうだ。

彼女ではない。ああ、そうか、彼女ではない。

小人のように小さな体からは、蟬にも負けないくらいはきはきした声が出る。僕はそれを途中で制した。

「いえ、大丈夫です。これくらいちよつと歩いていれば乾きます。タオル、ありがとうございます」

髪を少しだけ拭いて、タオルを返す。ごめんねえともう一度女性が言ったのを背に僕は歩きだした。ふと空を見上げると太陽がとて高く上っている。もうすぐ正午だろうか。水を浴びた体が早くも生温かくなっている。真夏の光線はどこまでも透明で、アスファルトの地表を輝かせていた。緩やかに動く大気に乗って学校からチャイムの音が届く。その時丁度、目の前にある信号が赤になって僕は足を止めた。二人とも無言だった。車が走り過ぎて行くと、耳たぶの下を僅かな風が駆けていった。

「何でだ」

菅澤が呟いた。僕はゆっくりと首を回す。菅澤は口を引き結んで信号を見つめていた。その相模がいつもよりややきつい。僕は身構えた。何を聞かれるか分かっていない。それにどう答えればいいのか、不安だ。しかし同時に愉快でもあった。そう、僕は菅澤と話している時、焦れたいような落ち着かないような気がして不快でもあるのだが、それと同じくらい、何かこう、悪戯でもしているような楽しい気持ちにもなるのだ。僕は彼をひやか

したことなど一度もない。後ろから肩を叩いたことも、些細な冗談さえ言ったことがない。それなのに菅澤は僕をこんな気にさせる。今はもう、喉から込み上げてくる笑いを必死で抑えていた。

「君のやることは、本当に、不可解だ」

口を歪めて言う。歯軋りをするべきか溜め息を吐くべきか、迷っているような感じだ。この苦りきったような表情が僕を愉快にさせる。彼にとって自分がどんなに不愉快な存在か考えると、笑いが止まらない。

「前に、言ったかもしれないが」

信号が青になる。彼はなかなか気づかなくて、僕が先に立って歩いた。置いていかれまいと急ぐ足音が聞こえる。それもまた可笑しい。堪えきれなくて、こつそり声だけで笑った。僕の後ろで菅澤が言っている。

「俺は、分からないということが、嫌いなんだ」

静かな声だった。不意に、笑いの虫が止む。僕達はまた信号の前まで来ていた。立ち止まり、僕が車道側を背にしてお互い自然に向かい合う。心臓が大きく脈打っていた。太陽の光に焼け、腕と首がヒリヒリと痛む。上体を包んでいた冷たい感触は消えていた。菅澤はしばらく黙り込んでいたが、やがて顔を上げる。その目が僕をぎんと睨んだ。

「何で、わざと水に濡れた？」

ふっと息を吐いた。何だ、そのことか。さつきまで鼓

動に掻き消されていた、草木や虫、車の音が再び聞こえてくる。菅澤は唸るように言った。

「早川、俺は見てたんだ。お前の目がすっかり、あの水を、捉えていたのを。お前の足が、着実に、水の側に入るのを。お前、わざと濡れたんだろ」

「へえ」

口をへらと動かした。予想外の反応だったらしい。ピョンと引つ張ったようにつり上がっていた彼の眉毛が、片方だけずるりと落ちた。

背中を抜いて、そのまま後ろ歩きに赤信号の横断歩道へ出た。菅澤があつと口を丸くした瞬間、踵を返して走り出す。生え際に汗が滲み、喉にあつた笑いがぶはつと、呼気になって表に出た。車が走り抜ける風が背中に当たり、けたたましいクラクションの音が耳を塞いだ。もう一方の車線から車が来ない内にと走り抜ける。横断歩道を完全に渡りきった時、菅澤の叫ぶ声が聞こえた。

「早川、おい！ 戻ってこい！ 俺に解明させろ！ 解明させろよ！」

分からないのは嫌なんだ！

菅澤の真っ赤な顔が見えるようだ。郵便局の角を曲がる。恥ずかしさを忘れた叫び声が雑踏に消えた。人込みの中でも僕は走り続けた。引きつった唇が、いつまでも直らなかつた。

朝、僕は憂鬱だった。今日も一時間目だけの補講に来ている。のろのろと歩く通学路はじんわりと蒸し暑い。空は一面雲で覆われ、所々の隙間から光が柱のように降りてきていた。時折太陽が雲間から顔を覗かせ、辺りが一瞬光彩を帯びてくることもあるが、それもまたすぐに陰る。水中でゆっくりと浮き沈みを繰り返しているような、おぼつかない気分が朝だった。

頭の中は昨日のことで占められている。菅澤の叫びを思い出すと今でも笑えた。走り抜ける時、周りからの視線が僕の横を滑って、彼に流れていくのが分かった。緩む口を押さえる。あいつあの後、どうしたんだろうか。置いて帰ってしまったが、どんなに気まずい思いでそこに立ち竦んだことだろう。

笑い過ぎて頬が痛いくらいだ。しかし、脇腹が冷えるような思いも隠せない。脳裏に蘇るのは音楽室での問い詰めるような口調だった。聞こえていない振りをしてみたが、きつと今度会った時には許してくれないだろう。たぶんあいつが一番聞きたいのはこのことだから。

菅澤は、もしかするとあのことを見抜いているのかもしれない。

そんな疑問が頭をよぎった。どうやって見抜いたんだ、と反論する声も僕の中にはあつたが、きつと見抜いてい

るということで正解だ。

菅澤、あいつは変態だ。けれど、信念というものを持っている。

恐らく何の迷いもなかったであろう彼の声を、真剣に思い出した。教室の中では空気のように、ちよつと器用に振る舞うことであいつは樂をしている。けれども解明したいという気持ちのフォークがほんのちよつとでも触れたなら、彼という果実を覆う薄い果皮はべらりと捲れるのだ。そして若い果汁が弾ける。その汁が思わぬ方向に飛び散って、誰かに迷惑を掛けたり自分を恥じたりするようなことがあるかもしれない。それでもその感情をきちんと言葉にして、人を感動させることがいつか出来るはずだ。気色が悪い程の好奇心は彼を導く指針になり、やがては周囲の人々をも変えていくだろう。

眩しい気持ちで思った。少し大げさかもしれないが、素直に。それは悪戯をするので忌々しく思っていた子供を、ある時急にかげがえなく感じるような、そんな感情だった。馬鹿みたいに真っ直ぐな奴は、人の心を上手いこと引つ掛ける。僕は彼を不愉快な奴だと思いが、嫌いにはなれないのだった。あいつはすごい。漠然とした思いが時折胸を塞いで、そのせいで口をつぐむこともあつた。

自分はどうかだろうか。問い掛けは自然に降ってきた。理性が弾け飛んでしまうような、果皮を刺激する信念は

あるだろうか。

目の前の信号が点滅する。溜め息を吐いて足を止めた。上を向き、もう一度長い息を吐く。走る気も起きなかった。ただ、灰空に舞う光の柱に心が落ち着く。確かあの柱は、天使の梯子というのだったか。ふっと敬虔な気持ちになり、目を瞑った。すると胸の中に想起する文字が二つ。

喪失。

駄目だ。絶望的な感覚が喉元までせり上がってき、僕は喘ぐように目を開け、仰いでいた首を元に戻した。その時だ。

ざらり。

再び、流れ弾。

僕は笑いたいような気持ちで目蓋を押さえた。

何で、また。あの時とまったく同じ横断歩道。しかも同じ朝。今度は一体どんな奴なんだ。苦笑に口を歪めながら人差し指と薬指をゆっくりと離していく。

そこにいたのは。

彼女。ペットボトル。

信号が青になった。彼女が真っ直ぐこちらに向かってくる。僕は片手を顔の上に掲げて指の隙間から右目を覗かせているという、ヒーローごっこをする子供のような、実に奇妙な格好で立っていた。

彼女は薄く笑った。その顔がだんだん、だんだん、大

きくなってくる。本当に。そして、

「うわあ！」

僕は悲鳴を上げた。自分でもみっともないと思うような声だった。周りの人が何ごとかと振り返っては、目を逸らしていく。大したことは起こっていない。彼女が僕の右手を左手で掴んだだけだ。しかしそれだけで僕には十分だった。早鐘のように鳴る心臓を片方の手で押さえながら、何か言わねばと口を開く。だが荒い呼吸以外に何ものも溢れてこないのだ。彼女が言った。

「あなたも、なのね」

肩が震えた。彼女の指が僕の指にひゅるりと絡みつく。あつと思った瞬間には解かれていた。熱も柔さも感じ取る間なく。すぐに、離れた。彼女はそのまま身を翻すようにして歩き去ってしまう。

僕も、なのか？ 僕と彼女と、何が同じだった？ 混乱した。

僕は再び喘ぎそうになる呼吸を整えながら、その細い背中にふらふらとついていく。

部屋に入ると植物の匂いがした。玄関を開けてすぐ目に入るの、横に広くて縦に狭い出窓。そこには茶色い液体に浸かった植物が十数個程、一列に並んでいた。花はどれにもついておらず、長い葉がだらんと白い壁に垂

れている。それらは本来緑色なのか白なのか、分からないぐらい弱り果てた色をしていた。きちんとした花瓶に入れられたものではなく、使われているのは、金魚鉢、ピッチャー、シャンパングラス……透明だということだけが共通するものだった。液体が茶色なのは腐っているからだろうか。確かに先程からそのような匂いがして、喉まで嚙つきそうならいだ。けれどもその中に生える根は驚く程に白く、死んでいるように思えない。それは陽に透ける茶の中で鍾乳石のように力強かった。

彼女についていった先にあつたのは、古い一戸建てだった。雑草の生えたブロック塀に囲まれた、黒い瓦屋根の家。僅かにある庭は草ぼうぼうで、物干しは竿が通っておらず、支柱だけ真っ赤に黴ていた。入り口は曇りガラスを嵌めた木枠の引き戸。それを彼女が開けると光が入ってきたので驚いた。庭はマンションの影になっていてとても暗かった。この出窓が負う役目は重要であるらしい。

玄関に入つてすぐの部屋で彼女に待たされていた。外観からはイメージ出来ない洋風の部屋だと思ふ。植物も日本風ではないし、床もフローリングだ。水色のカーテンが風に煽られ、ヤニで黄色く汚れた壁に張り付いている。ふとB棟を思い出した。人の匂いが染み付いているくせに、虚しい建物。ここはあそこによく似ている。何年も人が住みついている形式はあるのに、生活が感じら

れない。ただ植物の匂いが部屋の中に充満していた。

「来て」

声の方を向くと、隣の部屋のドアを開けて彼女が手招きしていた。豊かな髪の毛が右肩に全て流れている。その上で棒のように細い手が、おいでおいでと揺らいでいた。

「準備が出来たの」

招かれて入つていった部屋はダイニングスペースだった。と言つても、テーブルなどはない。ガスと流しが隅の方に積めたみたいになっている。中央に垂れるペンダントライトには、電球が入っていないかった。丸い覆いの中で蜘蛛の巣が紗を作っている。

さらにこの隣にも部屋があつた。両側に開けるタイプの引き戸が全開にされている。そこに、彼女と彼女が準備したというものがあつた。両開きの扉が舞台じみて見える。その中央で彼女はそれに話し掛けているのだった。

「今日も新鮮なお水をとってきたの」

それは、目を疑う光景だった。霊的な何かを感じてもいいのかもしれない。自分でも知らず知らず、足を潜めて、僕は彼女に近づいていった。

「ねえ」

横になり彼女が撫でているのは、人間の骸骨だった。それも丸々一式。模型のように完璧な頭蓋骨から始まつて、脊柱を軸に対象形を描く肋骨、寛骨から伸びる長い

大腿骨、先は小指の関節まできちんと揃っている。以前
図書室で人体について書かれた図鑑を読んだことがある
ので、これら骨の名前はよく分かった。骨はその位置通
りにきちんと並べられていて、混じり気のない黄土色を
している。遠い昔に死んだ骨のような色だと思った。

それが彼女と寝そべっている。頭蓋骨に空いた二つの
穴は、彼女の行為など気にも留めず天井を見つめていた。
骸骨と彼女の周りは、黒に近い赤の線で囲まれている。
筆で塗ったのか、擦れていたか、弾けたような跡が
残っていた。色が白だったら、刑事事件の現場と見間違
えたかもしれない。そういうものに似ていた。その杵か
ら骨の位置をずらさないよう、彼女は指だけを動かして
いる。僕はそれを見下ろしていた。

「ねえ、いつになったら生まれてくるの」

呟くと彼女は骨から中指を離して起き上がった。僕は
数歩後退る。彼女は背の後ろにあったペットボトルを抱
えて、その蓋を開けていた。

「早く、生まれて来て」

子供の頃、しつとりしたガーゼで耳の内側を拭いて貰
ったことを思い出した。彼女の声を聞いて。甘い記憶は
全身の高鳴りの裏で僕を踏み止まらせた。生まれるとい
う単語から引き出されたオギヤーオギヤーという幻聴が
心臓を打っていた。

ペットボトルの先を彼女は脊柱を支えている仙骨に向

けた。仙骨に当たった水は弾けて、寛骨を構成する三つ
の骨、腸骨、恥骨、坐骨にぶつかると、勢いの良いものは
上腕骨まで跳ねた。仙骨を濡らした水はそのまま尾骨を
伝い、フローリングに染み渡っていく。

目を奪われたのは水の勢いだった。輝きも透明さも僕
を捉えない。惹かれたのは、吸い込まれるように落ちて
いく動きだった。

やがてペットボトルが軽くなってくると、彼女はそれ
の尻の方を片手で持ち上げた。そして空いている方の手
で骨を愛おしげに撫でる。これから食べる豆の弾力を確
かめるように、恥骨を親指の腹で押した。水がなくなる
と仙骨に頬を当てて蹲る。長い髪が腸骨と手根骨を隠し
ていた。足の指が下肢を構成する腓骨と脛骨の隙間を行
ったり来たり、いつまでもなぞっていた。

「ねえ、君は復活を信じる？」

少女のように可憐で、情婦のように潤んだ声。僕に向
けられた問いだった。今さらではあるが、自分の存在を
確認されているという事にうろたえる。黙っているし
かなかつた。返事を待たずに彼女は続ける。

「私は私のあの人を、私のお腹でもう一度生まれ変わる
ように、命の源を捧げているのよ？」

「へえ。死体が水を得ればあなたに還ると？」

「ええ」

「なるほど」

分かったような気分になって頷いた。骨を眺めやる。乾いた頭蓋骨、濡れた尾骨。なるほど。彼女が求めているのは確かに生殖だ。こんなにも異様なことであるのに冷静に判断した。だがそれは一時のことに過ぎなかった。「私はね、あの人を殺してしまったの」「え」

「ナイフで刺してしまった」

脈が早まる。僕は思い知った。異様なことだから冷静に対処出来るのだ。自分にとって蚊帳の外だから、動揺しないでいられる。恐怖の材料は自身の胸の中にあった。痛みを知っているからこそ、本能が逃げろと叫ぶ。刺してしまった。

肉を串に刺す、虻に刺される、棘が刺さる、人が人を刺す……。

気がつくのと、右肩を押さえていた。朦朧とする頭の中に、彼女の声が入り込む。

それは唐突な告白だった。具体性も切実さも欠けた話。三文芝居のような、言い訳のような。物語性も責任も持たず、ただその鋭利な言葉だけが恐ろしかった。

「私、あの人を愛してた。けれどたまに、どうしようもなく憎いと感じたの。私はあの人に、くだらないテレビを見て笑って欲しくなかった。新聞を出しっぱなしにして欲しくなかった。勧誘の電話にイラついて欲しくなかった。あの方は完璧なあの人でいるべきだった。私が恋

したあの人でいるべきだったのよ。愛を伝える行為でさえ時に腹立たしかった」

声は静かだったが、語尾がインクのように滲み震えていた。親指と人差し指が肋骨を擦っている。

「ある日、あの人に、いつものように、朝食を出した時だった。私はあの人にお腕を渡そうとした。そしたらあの方が私の目をじっと見るの。それで、顎をちよつと動かしたの。あの人、置けって命令したのよ。口を動かさないで」

彼女の指が骨から離れた。

「ちよつと前まではそんな仕草、何とも思わなかった。むしろ愛おしかった。でも、いつからかしら。あの方の歩き方も足音も、本を読む時の格好も笑顔でさえ、私は一瞬、それを見た瞬間、殺してしまいたくなった。腕の関節がすうっと冷えていくような感じがして、あの人への嫌悪感に叫びたくなるの。胸が空っぽになって、それが私を残酷にした。あの日もこの感覚が襲ってきて、気づけばお腕をあの人に投げつけていたわ。行動に出てきたのは初めてだった。買ったばかりのスーツが味噌汁でびしょ濡れになった。臙脂色のネクタイにネギと豆腐がくつついていた。大きな声を上げてあの方は立ち上がったの。そして、そして気づいたら」

話が進むにつれ彼女の声は高くなっていく。これ以上はと耳を塞ぎかけて、不意に止んだ。

しばらくして、
「私、あの人を刺して殺していたの」
という、か細い声がした。

彼女が男を殺した。

それを確信しても、何とも思わなかった。

ああ、そうか。そしてこれは、その男の骨なのか。

完璧にマヒしていると思った。今なら彼女の言うどんなことでも受け入れられる。先程までの恐怖は急速に冷えていった。僕はもう逃げられない。これはその種の告白だ。誰かを当時にするための。愚かな鼠を狙う毘た。僕はまんまとケージに入れられた。

口に当てた手を下ろし顔を上げると、彼女が無言でこりと笑い掛けてきた。ワンピースの襟元がぐっしより濡れている。食後の幼児のようにも、吐血後の病人のようにも見えた。

「この水はね、ここの坂を下って、ずうっと行ったところからとってきたの」

「知ってる。湧き水のことだね。前に、マラソン大会でその脇を通ったことがある。鬱蒼とした山の斜面から溢れるあの水だろう？」

「ええ。そうよ。その、きれいなお水。山から湧くあの水なら、あの人を起こして、私のお腹まで導けると思っ

たの」

俯いて、彼女は自身の腹に触れた。蛙のように細い足の上にあるそれは、膨らみを感じられない。むしろ窪んでいるような気さえた。物憂げに目蓋を伏せて彼女は腹を撫で続けていた。それを見て、思いつく。

「あなたも飲んでみればいい」

声は驚く程よく響いた。彼女が顔を上げる。何も無い、手抜き現代アートのような部屋で、僕は彼女に言った。処女に受胎を告げる、敬虔な使いのように。

「たとえ目覚めても、宿る子宮が不浄ではいけない。あなたも飲むべきだ。胎内を高めるべきだ」

そうだこれは邪教の儀式だ。赤黒く、血を模した円による結果。彼女は堕ちた聖女だ。

彼女はしばらく呆けたような顔で僕を見つめていた。腕をだらんと垂らしたその姿が、気色悪くてあどけない。僕は口元に笑みが広がっていくのを感じた。優越感が胸を満たす。その時だった。

聴こえた。

耳を疑う。どこから微かに聞こえる旋律。この場には明らかに不釣合いで幻聴と思えなかった。

「ああ、これはお隣の」

力の入らない声で彼女が言った。音源を探していた僕

は首の動きを止める。

「よく、音楽をかけているの。こつちまで、響くくらい」

その後も彼女は何か言っていたが耳に入らなかった。

この旋律には憶えがある。有名過ぎるくらい有名な。

脳内を駆け巡る記憶。指先が痛い。その痛みで気づいた。

滑らかで冷たいあの感触を、僕は忘れることなんて出来

ない。

ぱくりと開いた心の割れ目に、ピアノの音は流れ込ん

でくる。

——ラ・カンパネラだ——

楽譜を見る前にCDを聴いた。それがいけなかった。

あまりにも美しい夢の代償は、不可能という残酷な痛

み。あの日知ってしまったもう一つの世界。

このピアノリストは魚なんじゃないかと思った。

一年以上前の感想だが、今でもよく憶えている。ノー

トに書きつけたようにその感動を思い出せた。

鐘の音だと解説にはあった。けれども僕にはそう聴こ

えない。これは人間の聴覚が捉えたものではない。一つ

一つの音が放つ、微細で甘美な揺れ。青紫に染まる水の

園で、雌雄の魚が舞う。尾を交差させ、胸鰭で触れ合い

ながら。水草の迷路や、遮蔽のない青を泳いでいく。鱗

を包む水の流れは時に優しく、時に残酷な表情を見せな

がら進んでいく。音は軽快で、例えるなら待ち針につい

た玉のように、まん丸でつるりとしたイメージ。音を鳴

らしているのは確かにその球体なのに、針の方が胸に刺さるようだった。魚は苦しみなんて知らないで、優雅に自由に踊っているはずだ。それなのにこの苦しみは何なのだろうと、あの時も、そして今も思っている。

あの日、興奮しながらCDケースを開け、ブックレットを取り出した。もどかしかった五本指で捲った、藍色

の表紙。そこにはこれから流れていく曲名とその作家名、

銀糸のようなレタリングでピアノリストの名があった。思

慮深くも熱を隠さずに、ピアノリストを賛美した解説。そ

の締めくくりは僕を愕然とさせた。

——しかし、彼女は耳が殆ど聴こえないのです。

追憶はふつりと掻き消される。隣人が音楽を止めたの

だった。魚の踊る湖底から、僕は彼女の家に戻ってきて

いた。人骨が真ん中に置かれた、目覚めの悪い夢のよう

な現実だ。

口から零れた。

「僕も水が欲しい」

実際、喉がからからに渴いていた。だが水を欲したのは

それが理由ではない。

ラ・カンパネラ。手の届かなかった世界。

音楽を作る時、僕は何ものにも身をゆだねられなかつ

た。こんな風に、魚みたいに、流れに任せるように弾く

ことなど。どうやって跳ねるのか、どうやって泳ぐのか。

飛び石に足を載せることも、水面に顔をつけることも出

来やしなかった。背もたれの椅子の上で、落ちないように身を縮めているだけだった。

でも、もし叶えられたら。

何度願ったことだろう。直接の原因ではないのかもしれない。けれど反逆者だけが僕をそのかした訳ではないのだ。僕の果皮は臆病なくせに弱かった。

——菅澤、そうだよ。僕は思い出していたんだ。自分でも気づかない内に——

「まだ、お水はあるわ」

いつの間持ってきたのか、彼女が新しいペットボトルを抱えて立っていた。満面の笑みを浮かべている。その笑顔に目の周りの隈が不気味だった。人間ではない生き物のようだった。

「今日は三回往復したの。だからまだあるわ。はい」
「ありがとう」

両手でそれを受け取った。ずしりと重い。しばらく腕の中にあるそれを眺めた。薄暗い部屋の中で、水は光を放たず揺れている。遠くから雷の前触れの音がした。窓の外にはもう光の柱さえ見えない。完全な灰色だった。曇天。鼻の奥が急に湿っぽくなり、どこか甘い露草のような匂いが喉に入り込んだ。僕はペットボトルを床に置く。

左手で右手の、手袋を掴んだ。

——さあ、見るがいい。反逆心のなれ果てを——

心の中で呟いた。こんなところでも僕は菅澤のようになれない。何であんな奴のことを思い出すんだと、叫ぶ代わりに苦笑った。

強く引き抜いた薄手の白い布地。その下にあるものを確認して、彼女の唇は高くつり上がる。

そこには四本の指があった。

中指の欠けた僕の右手が。